
求めたもの

龍宮瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

求めたもの

【Nコード】

N27760

【作者名】

龍宮瑠

【あらすじ】

野良犬として生まれ、野良犬として生きる主人公の生き方。人間に対する恐怖や怒りを次第にといていく出会い。

求めたもの（序章）

「無事に今日が迎えられた…。」

夜も明けないまだ薄暗い空を眺めて彼は呟いた。

大きく背伸びをして寝床から立ち上がり周りを見渡す。

静まり帰った世界で彼はゆっくりと浜辺に向かい、浜辺を歩く。それが日課なのだ。

散歩を終え気が付くと周りを覆っていた闇は影を潜め水平線の向こうには太陽が顔を出していた。

「無事に今日を過ごせますように…。」

太陽を見つめながら呟くと彼は浜辺を後にした。

元いた場所への帰り道の途中で声がした。

「やっぱりここに来てたのね。」

顔を上げるとそこには薄汚れた白い犬がいた。

「こらっ、まだ暗いとはいえ一人で出歩いたらダメじゃないか！」

すぐに駆け寄り辺りに注意しながら彼女を叱った。

「ごめんなさい…。でも起きたらいないんだもの心配したわ。だから匂いを追ってきたのよ」

彼女は少しシユンとし、こちらの顔を伺いながら事情を話してきた。

「どーゆー理由であってもこんな危ない事はしちゃダメだ！」

厳しく叱るつもりだったのだが、彼女の優しさだったのだと考えるとそもそも出来ない…。

「君はまだ色々な事を学ばなければならぬ。軽率な行動だけは今後しない」と約束してくれ。」

これ以上彼女を叱るのも心苦しいと感じ、少し優しく彼女に伝え、話を切り上げた。

その変化に彼女は気付き、それまで彼女を取り巻いていた暗い雰囲気は一気に消し飛んだ。

こちらの横にピタッと、くっつき帰りの足取りを促している様だ。

彼女の変化の早さに少し戸惑いながらも彼は帰路を歩き始めた。

「兄さんはよく私を子供扱いするけど、私だっていつまでも子供じゃないわ！少し兄さんより知らない事がある位で、もう大人よ。」
帰路の途中で、彼女はまるで演説でもするよう彼に同じ様な事を何度も話していた。

子供の様に扱われている自分の対応に不服があるようで、言葉には少し嫌味が…態度には少し苛立ちのようなものが感じとれた。

しかし、覚えた事・知っている事などを話している彼女の顔はやはりあどけなさが残る子供であった。

延々と続く演説に終止符を打ったのは意外にも彼女の方だった。いや、正確には彼女の腹の虫だった。

「お腹が空いたわ。」

「じゃあ、食料でも調達しに行こう。」

彼女は自分の腹の虫の音を聞かれ少し恥ずかしいといった感じであったが、気付かなかったといった表情で彼は言った。

この延々と続く演説を切り抜ける機会を逃したくなかったのだった。

食料を得るには人間が住む「街」へ出なければならなかった。

辺りはすっかり明るくなっており、「街」も少し慌ただしくなっていた。

小高い丘の上から様子を伺っていた彼らはその「街」を少し怯える様に見つめていた。

「あまり時間が経つとよくない。行くよ？」

彼は自分にも言い聞かせる様にそう伝え丘を下りだした。

彼女もそれに続き丘を下る。不安からなのか、さっきまでの熱弁していた彼女とは思えないような顔をしていた。

当然だ。自分ですら怖いからだ。

振り返り彼女に「大丈夫。俺がついてる。」

気休め程度しかならないだろうがその言葉は彼女には十分な安心であった。

途中何人かの人間に会ったものの、幸いこちらには全く興味のないといった感じの人間であった。

ようやく厳しい冬の季節も過ぎ、辺りには花や緑の香りを感じながらも彼らにはそれを楽しむ余裕はない。

彼らは野良犬である。

周りからは敵意の目で見られ、無視され、時には危害さえも加えられる対象なのだ。

いつその矛先が自分へとくるのか分かったものではない。そういった状況である以上彼らには季節の移り変わりを楽しむなど不可能なのかもしれない。

辺りを慎重に警戒しながら無事に餌場に着き餌を探すものの目ぼしい物は無いようだった。

最近では人間が自分達の餌となるゴミ捨て場にも小屋やネットなどが配置され食料の確保がままならない状況である。

「ダメかあ…」彼は焦っていた。

ここ二日間ろくな食事をしていない。

自分は平気なのだが、やはり隣にいる妹の事が気がかかりであったからだ。

あばら骨が浮き出て、目元は目やんで真っ黒になっている妹の姿が彼の焦りに拍車を掛ける。

「大丈夫よ！次に期待しましょ！！」

彼の気持ちを察したのか彼女は明るく振る舞ってみせた。

この状況下であどけて見せる彼女の態度に何度救われてきたのだろう…。

しつかりしなくては！彼は自分に渴を入れ再び歩き出した。

「うん。急ごうー！」

しばらくして、次の餌場に着いた。ここでは人間のゴミの管理も緩やかで、豊肥な餌場として有名であった。

だが、やはりそういった場所では競争率が激しくすでに他の野良犬達が食事をしている最中だった。

「おや？来たのかい？遅かったねえ。もう目ぼしい物はほとんど残ってないよ」そう声を掛けて来たのは一匹の老犬だった。

「やあ、じいさん。遅かったかな？」

「まだあるといいんだか…。ちよつと待つてな。」

そう言うとき老犬はゆっくり体を起こし仲間を呼んだ。

「セスのじいさんどうしたんだい？」

やって来た一匹がそう訪ねると「この子らにも食料を分けてやってくれ。」老犬は優しい口調で伝えた。

「皆大体食つちまったからな。とりあえずついてきな！」

そう言うて走り出した。セスじいさんに促され後を追う案内された場所には魚の骨や人間の食べ残した物が僅かに残っていた。

「わりいな。もう少し早ければもっとあつたんだが…」少し気まずそうに案内役が言った。

「いえ、貴重な食料なのに分けてもらって感謝しています。」

ようやくありつけた食事だ。彼にはその事実がなにより嬉しかった。

妹へ先に食べるように薦め、その様子を見ながら自分もゆっくり食事を始めた。

自分は空腹感を紛らわせる程度にし、妹に優先的に食料を与えたが、やはりこの二日間の空腹を考えると十分とは言えなかった。

食事を終えると案内役をしてくれた犬が話し掛けてきた。

「あんたらさ、うちのグループ入っちまえよ！そうすりゃ食料だつてそれなりに確保出来るし、ましてや小さい妹抱えてなんてあんたの負担もでかいだろうよ？セスじいさんの知り合いなんだし歓迎するぜ？」

「ええ、少し考えておきます。」

「おう！じゃあまたな！待ってるよ！！」

案内役とは対象的に彼は乗り気ではなかった。

当然、案内役が行ってる事は正論であり魅力的に感じる。

老犬で走る事もままならないセスじいさんが、食料にありつけるのも、あのグループがあるからであろう。

一匹であればろくな食事にもありつけず、餓死してしまう。

だが、その反面グループには危険も伴うのを彼は知っていた。

良質な餌場には他のグループもやって来たりし、その都度彼らは自分達の餌場を守るため戦わねばならない。

現に彼らには戦いによる傷跡が幾つもあった。

そしてそういった生きるための戦いには性別や年齢が関係ない事も彼は知っていた。

もう一つ…

こちらが彼にグループ入りを避ける要因だ。

グループで行動すれば周りから目立ってしまう事であった。

それは必然的に人間に発見されやすくなってしまふ事である。

野良犬社会でもっとも恐ろしい事…

それは人間による狩り。野犬狩りである。グループではそれに会う

確率が上がる。

捕まった者は二度と戻れない…

捕まりどうなるか…殺されたかすら分からない事が彼らにより一層恐怖を植え付けるのだ。

そんな状況に彼女を巻き込みたくない。

だからこそグループ入りに歯止めが掛かるのであった。

食事を終え、セスじいさんやグループに挨拶をし足早にその場所から去った。

感謝はしているが、やはり危険を感じる以上彼らグループと長居はしたくなかった。

「いつでもおいで。」

去り際に優しく声を掛けてくれたセスじいさんの言葉が何故か頭に残ったまま歩いていると「お腹いっぱい！！セスのおじさんホントに優しいね！！」

神妙な顔で歩く自分に気に掛けたのか妹が話し掛けてきた。

「ああ…そうだね。」

前半は嘘で、後半は本当だろうと自分で推測しながら彼女の事を考えた。

もう少し食事をさせてやりたい…

その思いで今度は頭がいっぱいになった。

すると一人の人間が近づいて来てるのに気付いた。

「しまった！」っと思いき慌てて警戒する。

妹の前に立ち前傾姿勢をとり牙を剥く。

「それ以上近付くな！」

その態度で大概の人間は去っていく。

しかし、その人間はゆっくりと近付いてきた。

「これは…」

彼は少し警戒を緩めた。

この匂いは…。

ゆっくりと近付いて来たのは女性だった。これまで何度も自分達に食料を与えてくれた人間。

「見付かって良かったわ。心配してたのよ。大丈夫。餌をあげに来ただけよ。心配しないで。」

なぜ彼女が自分達なんかに近付こうとするかは彼らにしたら理解に苦しむ所だ。

これまで会った人間は彼らに対して無関心であったから。何人かは興味本意で近付いてきたりもしたが、こちらが威嚇するとすぐに去って行く者ばかりであった。

変わった人間もいる。

そんな事を考えていたが、なにより彼らには嬉しい訪問者であった。

一定の距離まで近付いて来て、道に餌を置いたら彼女はそこから少し下がった。

下がらなければ彼らが餌に近付こうともしない事を彼女は知っていたからだ。

「兄さん？」

「ああ…大丈夫だと思う。食べよう。」

空腹が満たされていない現状では有難い食料だったので彼らはそれを食べた。

勿論心を開いた訳ではない。食事中も常に周りや彼女を見ながら警戒はしていたが、彼らを見る彼女の顔はとても穏やかであった。

「家の子になつてくれたらなあ……」
食事を終え立ち去ろうとする彼らを見ながら彼女はそう呟いた。

「ウチノコ？」

その場を去りながらも彼はその言葉の意味を考えていた。

「ウチノコつてなにかな？」

その言葉で彼は我に帰った。隣を歩く彼女もどうやら同じ事を考えていたらしい。

「関係ないさ。さあ、いつまでもここいらにはいられない。少し急ぐよー！」

そう言つて彼は少しスピードを上げた。

少し気にはなつていたものの彼にはそれがどういった意味なのかは見当もつかなかった。そして、それを妹に知られる事がどうも居心地が悪かつたのだ。

久しぶりの満腹感に喜びと安堵を抱えながら彼らは帰路に着いた。

その夜、久々の満腹感に妹は満足し、ぐっすりと眠っていたが、何故か彼にはあの人間の言葉が耳に残り眠れずにいた。

「ウチノコつてなんなんだろ……」

帰路に着く途中もずっと考えていた言葉。

あの人間の言葉と言う事が彼により一層の興味を与えていたのだつた。

彼には人間の言葉は分かるがその意味までは理解出来ていなかった。当然である。これまで野良犬社会で育つて来たのだから。

それでも少しは理解している言葉もあるのだ。

「キタナイ」「メイワク」「ノライヌ」彼らに対する人間が発する言葉は大体がこれであり、その目には明らかに敵意に満ちたものだったため、容易に理解できるものだった。

しかし、あの昼間の人間が発した言葉：「ウチノコ」。

彼が初めて聞く言葉であり、あの人間からは敵意などまったく感じなかった。

自分達を見るあの目…

以前どこかで同じような目をどこかで見た気がする…
いつ見たのか思い出せないが、どこか心地よい…

その瞬間彼は我に返った。あり得ない事だった。

危険であるはずの人間に心地よさを感じた自分に少し戸惑いながらも彼は考えるのをやめた。

人間に対する感覚をプラスに捉えようとした自分の考えに少し苛立ちさえ感じていた。

人間は敵だ！！

そう。親からの教えは絶対なのだから…。

そう自分に言い聞かせ横で眠る妹を見た。

「今度セスじいさんにも聞いてみるか。ウチノコ…ってのを。」

彼はそう呟き、目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2776o/>

求めたもの

2010年10月12日16時42分発行